

第5回 声楽家

成田 博之さん＝1986年度卒

音楽の可能性見つけた

声楽家（バリトン歌手）の成田博之さん＝1986年度卒＝は、宮城県古川高で初めて、声楽やピアノなどの楽器演奏を学びました。第一線で少なからぬ音楽家が活躍する古高は、生徒が可能性を見つけ、伸ばすことができる場だったようです。



開花するエネルギーや栄養を黙々とため、次に挑む準備をする場が古高でした。

オーケストラを聴き始めたのは小学5、6年です。中学時代、イタリアのテノール歌手、マリオ・デル・モナコが亡くなり、FMやテレビが特集で放送しました。歌声に魅了され、合唱の前で一人歌い、演技する姿に「カッコいい！」と、はまりました。そして、歌声の素晴らしさを感じながら、多くの歌手の歌を聴きました。軟式テニスをしていて、ピアノに触ったことはないし、歌を歌ったこともありませんでした。でも、ソロの勉強を趣味でやりたくなったのです。古高に進んだのは、「声楽の先生がいる」と聞いたのも一つありましたね。

そして、友川（広人）先生から週1回、30分ピアノ、30分声楽みたいに個人レッスンを受けました。ピアノは指の動かし方から教わりました。部活動は吹奏楽部で、担当のテナーサクソも「ド、レ、ミ」からの練習でした。

小さい時から星にも興味があり、高校2年ぐらいまでは、大学で天文学を勉強したいと思っていました。でも、天文学は物理の中でも一番難しい計算が必要で、「こりゃ無理だ」と思いました。僕は望遠鏡を見て感動するのが楽しみで、数字で解く天文学は好きではなかったのだと思います。音楽が楽しい、表現するのが楽しい——。そういう人間だったんですね。

それから、高校の音楽の先生になって宮城に戻るんだと音大を目指しました。ただ、家にピアノはないし、歌の練習は恥ずかしいので、高校の練習室で練習しました。部活が終わってから学校が閉まるまで一人で練習です。くらーい、夏はあつーい、冬はさむーい練習室でした。

当時は男子校です。女子高の文化祭に行くのは「軽いやつ」で、行かないプライドが男子校たるものでした。でも、授業中に窓から道を歩く制服の女子高生が見えると、みんな

授業そっちのけで見えてました。硬派な男子校だから黙々と努力したのかと思いますが、共学だったらもっと楽しかったかなあとと思います。

友川先生の指導に「これをしてしなければだめ」はありませんでした。歌いたいという姿勢が本物か黙って見ていてくれ、生徒の興味に可能性を与えてくださったのだと思います。僕の音楽もそうですが、古高はいろんな可能性を見つけられた学校だと思います。

なりた・ひろゆき

旧古川市（現大崎市）生まれ。国立音大卒、同大学院修了。2000年の第69回日本音楽コンクール声楽部門第3位。文化庁芸術家在外派遣研修で、イタリア・ボローニャで学ぶ。東京二期会所属。バリトン歌手として、多くのオペラ舞台などに立つ。クラシック歌手がポップスを歌うユニット「ザ・ジェイド」にも参加する。国立音大・尚美学園大非常勤講師。



古高小史⑤

プロの音楽家を輩出

古川高は、音楽の専門コースがなく普通科だけの高校だが、クラシックをはじめプロ音楽家を輩出している。

1964～88年の同高音楽教諭で、ブラスバンド部などを指導した友川広人さん（81）＝55年度卒＝らによると、最初のプロは、東京交響楽団トロンボーン奏者として活躍し、現在は中新田バッハホール（加美町）シニアマネジャーなどを務める金沢茂さん（71）＝65年度卒。さらに、リヨン国立歌劇団歌手、東京放送管弦楽団コンサートマスター、東京交響楽団フルート奏者、NHK交響楽団クラリネット奏者、読売日本交響楽団クラリネット奏者らが続く。

金沢さんは「特別な教育を受けるわけでもない高校からこれだけ音楽家が出るのは全国的にも珍しく、私も不思議。自然の豊かさが原体験にあり、音楽表現に味わいが出るのかもしれない。自分の責任でやりたいことをやりなさいという校風も、（プロに進む）きっかけになるのでは」と分析する。友川さんは「自由な学校の雰囲気が生徒を育んだ」と振り返る。



1965年度の宮城県でのコンクールに優勝した金沢茂さん（2列目一番左）ら古川高ブラスバンド部と友川広人さん（前列右から4人目）＝友川さん提供